

ハンガリーとオリンピック

盛田 常夫

2012年オリンピック招致

3月中旬、国際オリンピック委員会のロゲ会長がハンガリーを訪れた。政府のオリンピック招致キャンペーン行事の一環で、ハンガリーのメダリストたちとの昼食会に参加するなど、日帰りの日程をこなしていた。

昨年、急に思い立ったように、政府はオリンピック招致を打ち出した。明らかに選挙目当てだが、必ずしもそうばかりとも言い切れない。旧体制の時代にながしろにされてきた都市のインフラ整備は、本腰を入れて取り組む課題だが、これまでほとんど手がつけられていない。1996年の万博開催を契機に取り組むはずであったが、開催断念で中途半端に終わっている。もっとも、万博予定地だった敷地には、工科大学の情報学科と ELTE の理学部が移転し、近代的なビル群が並ぶ情報関連の研究・開発の街に変身したし、ドナウ河を挟んで向こう側には、国立劇場が建設された。もともと、万博の跡地利用として、大学移転が予定されていたから、これは賢い投資だったと言える。だから、ここはもう一度、本腰を入れてインフラ整備に取り組みたい、そのために五輪開催という動機付けを利用したいというのは理解できる。

オリンピック招致というスローガンに反対する人は少ないが、実現可能性を信じている人はほとんどいない。これが現在のハンガリー世論調査の結果だ。現在のブダペストにはオリンピック会場として使用できる建物は一つもない。サッカーの欧州選手権の会場に使用できる条件を備えたスタジアムさえ、1個もない状態だ。すべて新たな建設が必要とされる。さらに、ホテル建設や交通網の整備、地下鉄の新規建設や高速道路の拡充など、巨額の投資が必要になる。これらを合わせると、少なくとも250億ドルの投資は必要になる。これはほぼ年間GDPの半分に相当する。万博開催の比ではない。

これらのことを勘案すると、やはり画に描いた餅という選挙キャンペーンの匂いが強い。

ハンガリーはオリンピック大国

財政面でみる限り、ハンガリーのオリンピック開催の資格は限りなく低い。それに引き換え、オリンピックにおけるハンガリーのプレゼンスは低くない。というより、ハンガリーはオリンピックのメダル獲得でみる限り、トップテンに入るオリンピック大国なのだ。この面で見れば、ハンガリーがオリンピックを開催する資格は十分すぎるほどある。

1896年の第一回アテネ五輪から2000年のシドニー五輪まで、夏のオリンピックでハンガリーが獲得した金メダルの総数は149個、銀メダル131個、銅メダル153個で、総数433個である。日本の金メダル獲得数は50個ほど少ない。夏季五輪のメダルランキングでは、ハンガリーはアメリカ、ソ連（ロシア）、英国、

フランス、東ドイツ、西ドイツについて世界7位である。東ドイツを除くと、堂々の6位である。しかも、上位に位置する国は、みな大国である。人口1人当たりの金メダル率でみると、ハンガリーは世界一ということになる。

もっとも、冬季五輪まで含めると、イタリアとスウェーデンに追い抜かれて、2つ順位が落ちるが、ハンガリーより上位にある諸国はすべて五輪開催を経験済みで、ハンガリーだけが未開催である。アテネが開催できるなら、ブダペストにできないことはないと考えても不自然ではない。

東側の五輪として注目を浴びたモスクワ五輪は、ソ連のアフガン介入で、西側諸国のボイコットに会い、中途半端に終わってしまった。EU加盟を実現した旧東側諸国が、その復興を祝う行事として、五輪開催をおこなうことに歴史的意義はある。旧東欧諸国で五輪が開催できる国は、当面のところ、チェコかハンガリーしかないことも事実である。

ハンガリーの伝統スポーツ

ハンガリーの五輪メダル数を知って、驚く人が多いだろう。目立った印象はないが、本当にそんなに取っているの、と。その理由の一つに、日本に馴染みのない種目での活躍がある。

すでにサッカーがハンガリー国民スポーツだった時代は終わった。東京五輪とメキシコ五輪の連覇は非常に印象深いだが、これ以後、ハンガリーのサッカーは凋落の一途をたどっており、現在のところ、その出口すら見えない状態だ。これに代わって気を吐いているのが、水球だ。この競技の歴史は古く、1932年のロスアンジェルス五輪、1936年のベルリン五輪、1952年のヘルシンキ五輪、1956年のメルボルン五輪、1964年の東京五輪、1976年のモントリオール五輪を制している古豪だ。以後長い低迷時代が続いたが、2000年のシドニー五輪優勝で復活をアピールした。

もともとハンガリーは全土に温泉が出る環境を利用して、各地に温泉プールが建設されており、水の競技には強い。第一回のアテネ五輪で獲得した2個の金メダルは、ハヨーシュ・アルフレッドが競泳種目で獲得したものだ。マルギット島にある屋外プールには、彼の名前が冠されており、昨年も水球の欧州選手権が開かれている。最近では、エゲルセギ・クリスティーナが1988年のソウル五輪から女子200米背泳ぎ3連勝という快挙を成し遂げた。1992年に岩崎恭子が金メダルをとるまで、エゲルセギが14歳の最年少金メダル記録を保持していた。

水の競技と並んで世界水準にあるのは、フェンシングである。ハンガリーでは文武両道の男子の条件として、フェンシングの心得が必須であった。その伝統を活かし、五輪でも目覚ましい記録を残している。男子サーベル団体は、1908年ロンドン、1912年ストックホルム、1928年アムステルダム、1932年ロスアンジェルス、1936年ベルリン、1952年ヘルシンキ、1960年ローマ、1988年ソウルの各五輪を制している。男子エペ団体は、東京五輪から三連覇を達成している。

興味深いことに、スラブやゲルマンのように体格に恵まれないハンガリー人が、意外に個人の格闘競技で活躍している。柔道には常に日本人に立ちはだかる選手がいる。バルセロナ五輪で71キログラム級の古賀稔彦と決勝を闘ったハイトシュは判

定で敗れたが、この判定はハンガリーでも話題になった。古賀の劣勢は否めなかったからである。バルセロナ五輪の95キロ級で優勝したコヴァチは、現在もなお、日本のホープ井上康生に立ちはだかる強豪である。

これも意外だが、プロのジムがないボクシングで、ハンガリーは8個の金メダルを獲得している。アトランタ五輪54キロ級で優勝したコヴァチ・イシュトヴァーンは2000年暮れにWBOフェザー級タイトルを獲得した。アマプロ通じて無敗の王者が、第一回の防衛線でよもやの敗戦を喫し、引退することになった。

陸上の投擲競技にも強く、とくにハンマー投げに伝統がある。2001年のカナダ・エドモントンで開かれた世界陸上のハンマー投げ決勝には、3名のハンガリー選手が進出した。なお、室伏広治の母はハンガリー系ルーマニア人であり、ハンガリーのテレビでは、3.5人のハンガリー人が決勝に進出したと報じていた。

2002年3月